【書評】

武田 徹『日本ノンフィクション史——ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』2017, 中公新書 2427

佐　山　一　郎

「ノンフィクション」の共有の度合いには甚だ心もとないものがある。適切な入門書になりうる通史が見当たらなかったことも低調の遠因だが、メディア側の擁護・支援の困難さがさらに拍車をかけている。芥川・直木両文学賞（1935-）＝小説作品への社会的関心がいぜんとして高い反面、最大のノンフィクション賞である大宅賞からして大衆的な話題性を欠く。

とはいえ主催の公益財団法人日本文学振興会が手をこまねいているわけでもない。1970年以来47回を数えてきた同賞を改称し、2017年5月以降を「大宅壮一メモリアル日本ノンフィクション大賞」として再出発したからだ。

その結果、5、6名の選考委員による選定方法は終了し、外部有識者会議による投票・講評、読者投票を参考に選考顧問が承認するかたちをとることになった。「大宅委員会」という名の外部有識者会議は、出版、新聞、放送、ネットメディアで働く10名余で構成される。またリニューアル後の同賞は、読者投票に特化した「読者賞」も新設している。第1回は、森 健著『小倉昌男祈りと経営 —ヤマト「宅急便の父」が闘っていたもの』（小学館・2016年）が受賞し、読者賞は菅野完著『日本会議の研究』（扶桑社・同前）に贈られている。前者は伝記で、後者はいわゆる内幕ものに該当する。

大宅壮一ノンフィクション賞として始まり、80名を超える受賞者を誕生させた同賞の初期段階については、著者・武田徹による本書第6章「ニュージャーナリズムと私ノンフィクション—大宅壮一ノンフィクション賞と沢木耕太郎」に詳しい。同章中の「迷走する大宅ノンフィクション賞」の項などは、権威の確立しない昨今の状況と地続きのように思えてならない。いみじくも武田は「『世界ノンフィクション全集』（評者注・筑摩書房・1960-1964年）がそうであったように、その選考の規定は緩い」（P.182）と記している。

たしかに授賞対象からして、「ルポルタージュ・内幕もの・旅行記・伝記・戦記・ドキュメンタリー等のいずれかに包括されるノンフィクション作品全般」と、その成り立ちからして雑駁なのである。同じように武田は今なら対象外となりそうなエッセー風の作品が大宅賞の初期に選ばれていたことも指摘している。曖昧さを生じさせていたその件のみならず、出発点であるはずの第1回受賞作『苦界浄土』を著者の石牟礼道子が辞退した事実も見逃さない。

こう記してゆくと日本のノンフィクションの悪戦苦闘イメージばかりが際立つが、かつては違った。大宅壮一（1900-1970）がノンフィクションの時代を準備し、このジャンル概念の開花に『テロルの決算』（文藝春秋・1978年）で大宅賞を受賞した沢木耕太郎（1947-）が多大な貢献をもたらしたからだ。

そうした時代史は当然のように武田も踏襲して

いる。アンドレ・ジイドのルポルタージュ『ソヴィエト旅行記』の翻訳に先駆けての『改造』1936年12月号の小特集「ルポルタージュ」から未来像までもを概観する意欲的な本書の重心も大宅、沢木に置かれている。読者獲得のために必要な物語性をよく理解していたのが両者であったからである。それもあってか、この『日本ノンフィクション史』は大宅壮一と沢木耕太郎の評伝的色彩さえ帯びている。

章構成は以下のように展開される。

●＜ルポルタージュと従軍報告 ――大宅壮一とノンフィクション1＞（第一章）
●＜社会派ルポルタージュと新中間層の擡頭――大宅壮一とノンフィクション2＞（第2章）
●＜トップ屋たちの蠢動 ――梶山季之と草柳大蔵の引力と斥力＞（第3章）
●＜古今東西森羅万象を描き出す ――筑摩書房『世界ノンフィクション全集』＞（第4章）
●＜テレビの参入 ――ドキュメンタリー映画から『ノンフィクション劇場』へ＞（第5章）
●＜ニュージャーナリズムと私ノンフィクション――大宅壮一ノンフィクション賞と沢木耕太郎＞（第6章）
●＜なんとなく、ケータイ小説まで ――文学とアカデミズムの間に＞（第7章）

この目次からは見えにくいが、物語分析論を加味したところに本書ならではの独創性がある。そのアプローチ方法による緻密な読みを徹底すれば、単なる時系列に沿った名作ガイド付き通史にとどまらなくなる。おのずと伝えようとする上での方法論（＝何を伝達するかではなく、どのように伝達するかの設計図）にまで論述が及ぶこととなる。大宅賞の歴史とも重なるせいぜい1970年代にまでしか遡れない「ノン（・）フィクション」がなぜそう呼ばれ、またなぜ必要とされてきたかを武田は生成構築過程の考察を通じて論じ続ける。

その際、著者が道案内役にしているのは、フランツ・シュタンツェル著『物語の構造―＜語り＞の理論とテクスト分析』（前田彰訳/岩波書店・1989年）、篠田一士著『ノンフィクションの言語』（集英社・1985年）、玉木明著『言語としてのニュージャーナリズム』（學藝書林・1992年）などの先行する労作である。

文藝評論家の篠田の場合は、ノンフィクション（事実究明の記述）の積極的受容が現代小説の常識的なありようになっていることに注目した文学論である。またフリージャーナリストの玉木の当該著作は、日本のジャーナリズム理論の脆弱さからの脱却をめざす論考で、60年代に発端を持つアメリカのニュー・ジャーナリズムを日本の貧しい近代ジャーナリズム（無署名性言語）に対する自覚態、対自存在とみなし、覚醒を促す画期的なジャーナリズム論になっている。

本書に通底する武田の問題意識は、既に同じ著者による『日本語とジャーナリズム』（晶文社・2016年）でも明示されている。日本語の構造から考察するジャーナリズム論は、日本文化論にも直結する。端的な例としてよく挙げられるのが、他者との関係性を前提とする一人称、「私」「僕」「俺」の使い分けである。武田には公共的な批評やジャーナリズムの道具としての日本語に対する危機感が、国際基督教大学の学生時代からあったようだ。

ここでいったん私的な回顧になるが、評者自身もまた編集と実作でノンフィクション史の内外を生きてきたことになる。「ノンフィクションとは何か」についての論考を1980年代前半から繰り広げた猪瀬直樹の雑誌担当編集者をやっていたこともある。沢木の牽引する方法的精神溢れるノンフィクションが、団塊・全共闘世代の世代芸といわれ始めた頃だった。

その時期にしばしば耳にしたのが、「ノンフィクション＝サッカー、フィクション＝ラグビー論」とでもいうべき物語ることへの禁欲的ルールだった。手を使わぬサッカーには制約から生じる醍醐味がある。それ故に素材としての事実酷使や

中途半端で取材の足りない部分を空想による辻褄合わせで埋めるノンフィクション・ノベルは、忌避すべき嘘くさい対象とされた。この古くて新しい、フィクションとノンフィクションの相互嵌入構造についての問題意識に基づく考察は、本書でも繰り返される。

そうした前史をふまえた場合、この『日本ノンフィクション史』の真の独創は、第6章から7章への架橋工事の部分になるはずだ。以下、長い引用になるのをご寛恕いただきたい。

「なぜ沢木は、そして日本のノンフィクションは、アメリカと違ってニュージャーナリズムからリテラリー・ジャーナリズムという潮流を用意できなかったのか。あくまでもひとつの仮説だが、その非対称性は、ノンフィクションの書き手の社会的位置づけの違いも関係するのだろうか。リテラリー・ジャーナリズムの担い手だったジョン・マクフィーや（トレーシー・）キダーは執筆の一方で、大学で教鞭を執っていた。つまり作品の売上げだけが生活の糧ではなく、商業性の高さよりも誠実な書き方にこだわれる環境がある。物語の輪郭づくりを強迫的に求められることなく、事実を淡々と描き出せる。行為者と表現者の間で行為者の側に比較的に軸足を置けるのだとも言えよう。/ 逆にノンフィクションの作品を市場原理にのみ委ねてゆくと、商品性を高める要請もあって、三人称、そうでなければ一人称を貫く文学的臨場感が重視される一方で、検証に開かれた誠実な書き方は重視されにくくなる」（p.219）

この先の一歩の可能性を武田は、さらに次のように述べて第6章を結ぶ。

「英語圏と比べると市場規模の小さい日本で、話題性の追求に走らず、事実を反証可能な形で丁寧に描いて行く社会科学的ノンフィクションを育成したければ、たとえば、アカデミズムをノンフィクション製作のひとつの場とし、市場原理以外の駆動原理――歴史的記録性への指向――を持ち込むような取り組みを検討する必要もあるのかもしれない」（p.220）

ジャーナリズムと等量のアカデミズムへの懐疑を持つ者からすれば、その着眼点が一般の読者には通じがたい記述のようにも思えてしまう。田中康夫著『なんとなく、クリスタル』（河出書房新社・1981年）や古市憲寿著『希望難民ご一行様――ピースボートと「承認の共同体」幻想』（光文社新書・2010年）などの旧話題作を縦横に論じた最終第7章では、武田自身の造語と思われる「アカデミック・ジャーナリズム」が何度か登場して来る。煙に巻かれた印象こそないが、門外漢をはねつけてしまう高次で晦渋なこのジャンル概念から中黒（「・」）が省かれる合体の日は果して来るのだろうか。またそれが新たな活路になりうるのだろうか。

学部生レベルの人たちに読んでほしい廉価な通史として取り上げてみたが、その際には、橋本陽介著『物語論　基礎と応用』（講談社選書メチエ・2017年）のような入門書が副読本として必要になりそうだ。